The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ピッツバーグ大学図書館における約3ヶ月の滞在型研修
Author(s)	久保山, 健
Citation	大学図書館問題研究会誌. 2009, 32, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25922
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ピッツバーグ大学図書館における約3ヶ月の滞在型研修
Internship at University Library System, University of Pittsburgh

久保山　　健*

抄　録

筆者は、2007年12月から約3ヶ月、アメリカ東部のピッツバーグに滞在し、ピッツバーグ大学図書館で実務研修を行った。目的としては、サービス系と情報系をカバーすることとした。本稿では、研修の概要、テーマ設定の経緯、準備作業、研修先での職場環境、調査の進め方、及び、図書館情報学の授業の聴講も含めた、個別トピックの概要を述べる。筆者が様々な面で強く感じた、大学図書館を巡る日本と北米の違いも併せて伝える。それが何らかの形で日本の状況にフィードバックされることを期待する。最後に、本研修をきっかけに生まれた活動の一例を紹介する。

目　次

１．はじめに
２．今回の研修の概要
　2.1研修のためのプログラム
　2.2出張滞在先
　2.3出張期間
３．ピッツバーグ大学の概要
　3.1大学の概要
　3.2図書館の概要
　3.3国際交流
４．研修テーマ
　4.1研修テーマ
　4.2研修テーマを決めるまで
　4.3事前の研修テーマの結果は
５．準備
　5.1英文履歴書
　5.2現地用のプリンタ
　5.3ビザ
６．ピッツバーグ大学での職場環境
　6.1身分
　6.2コンピュータ・アカウント
　6.3オフィス
７．調査の進め方
　7.1サービス系
　7.2情報系
　7.3東アジア図書館関係
　7.4その他
８．個別トピック
　8.1次世代OPAC
　8.2ラーニングコモンズ
　8.3館内のIT環境
　8.4学生証、身分証
　8.5調査出張
　8.6授業の聴講
９．長期・滞在型海外研修について
10．本研修から生まれたもの
11．まとめ

○1．はじめに○

2007年12月から、2008年3月にかけて、客員図書館員（Visiting Librarian）として、アメリカ東部のピッツバーグ大学図書館（University Library System, University of Pittsburgh）に研修のため滞在する機会をいただいた。本稿では、その概要や、いくつかのトピックを紹介する。

○2．今回の研修の概要○

2.1 研修のためのプログラム

今回の研修は、Elsevier社の図書館員国際研修プログラム（International library residency）の適用を受ける形で実施された[1) 2)]。

このプログラムは、図書館員の国際交流および

＊くぼやま たけし　大阪大学 情報推進部情報基盤課 図書館システム担当 2009年6月3日受理

発展のためのグローバルなプログラムである。研修目的や獲得したい目標を参加者が自主的に設定できる。Elsevier社は資金の提供、受入大学のアレンジなどのサポートを行う形で運用されている。第1回目の適用は九州大学の片岡真氏が受け、トロント大学での交流・研修を行っている[2) 3)]。筆者は、片岡氏に続き、日本から2人目の適用者となりピッツバーグ大学にて研修を行った[4)]。九州大学附属図書館はこの研修をきっかけにトロント大学図書館と学術交流協定を締結している[5) 6)]。

2.2 出張滞在先

筆者のバックグラウンドが広範囲であることも考慮され、ピッツバーグ大学が主たる研修先として選定されたと聞いている。

2.3 出張期間

出張期間は、2007年12月7日（金）～2008年3月6日（木）の約90日であった。本プログラムでは時期や期間も予算内におさまる範囲内であれば自分で選定できたため、業務上のスケジュールを考慮しつつ、2007年度中に終了できる時期を選択した。ビザが不要である日数の最大である90日に設定し、ピッツバーグ大学の担当者とも調整を行って期日を決定した。

また、季節については、比較的高緯度な地域であれば、比較的過ごしやすい時期を選択するのも合理的な行動だと思われるが、冬の時期を避ける術はなかった[7)]。

○3．ピッツバーグ大学の概要○

3.1 大学の概要

ピッツバーグ大学は、学生数は3万人以上、教職員数は約1万2千人の、医学部も有する総合大学である。ピッツバーグのオークランド地区を中心に、合計5つのキャンパスがある。

3.2 図書館の概要

図書館の数は28、蔵書数は500万冊を超えている。利用可能なデータベースも数百もあり、非常に多いという印象を受けた。

中央図書館が、オークランド地区にあるヒルマン・ライブラリー（Hillman Library）である。グランド・フロアからの5階建てであり、その2階部分全体が私の所属した東アジア図書館（East Asian Library）である。

東アジア図書館のライブラリアン及びスタッフの数は十数名であり、他に数名の学生スタッフが勤務している。

受入や雑誌といった管理系業務の一部、システム担当部署、保存書庫等は、オークランド地区から10km程度離れたビル内にある。通りの名前で、“Thomas Blvd.” と呼ばれている。システム担当部署がある関係で、何度かそこへ足を運ぶ機会もあった。

なお、医学系のHealth Sciences Library System 及び法学系のBarco Law Library は、いわゆるピッツバーグ大学図書館（University Library System）とは別組織である。

また、ピッツバーグ大学の情報科学研究科（School of Information Sciences）はU.S. News and World Reportの米国の図書館情報学の大学院ランキングでは、10位にランキングされており[8)]、授業の聴講等を通じて、そこに触れることもできた。

3.3 国際交流

ピッツバーグ大学図書館は、従来から主に中国の大学図書館との交流が盛んである。最近は年に複数の訪問図書館員（visiting scholar）を主に中国から受け入れている[9)]。期間は数ヶ月のものが多いようだ。逆に、ピッツバーグ大学のアジア系以外の図書館員が中国に派遣されたこともある。

私は日本からの訪問図書館員としては、1人目だったそうである。ピッツバーグ大学図書館としても、日本の大学図書館との交流は考えておられるようで、もしその1人目になれたのであれば、

光栄である。

写真1.　Hillman Library

○4．研修テーマ○

4.1 研修テーマ

出張前の最終段階でまとめた研修テーマは以下の通りである。

（1）Information literacy = 情報リテラシー
（2）Electronic service = 電子的サービス
（3）Management of computers in reading rooms = 館内のパソコンの運用
（4）Visiting other libraries = 他館への調査訪問
（5）Renewal of library integrated system = 図書館業務システムの更新
（6）Dissemination of East Asian publication in US = 米国における東アジア資料の広がり

大まかに分けると、サービス系と、情報系とを2本柱に、他館の調査と、以前から興味のあった“(6)”を加えた。時間配分としては、前半にサービス系、後半に情報系と大きく分けることにした。

2つの柱を置いた理由は、私の主な担当業務（図書館系のシステム、ネットワーク）に関連するテーマだけでなく、今後の「糧」になるように、時間の許す限り幅広く調査したいという気持ちがあったからである。

もちろん、「糧」というのは、個人的な経験を広げていくことであり、勤務校に寄与できる有形無形の材料を得ることでもある。

一方、幅を広げたことで、焦点、ないし「結果」がぼやけるのではないかと指摘を頂いたり、自分でも不安に感じたこともある。しかし、自分自身としては、帰国後の仕事をするためのベースを広く得たいという気持ちが強かった。

4.2 研修テーマを決めるまで

4.2.1 当初はElsevier本社の担当者と

当初は、頂いたプログラムが、具体的な実務を行うのか、調査研究的なものなのか、実習生のように学習するのか、具体的なイメージをつかめずにいた。

Elsevier本社の担当者と懇談した時には、同社の製品を活用するためのWeb上の技術についての説明もあったので、学術データベースや電子ジャーナル周辺の機能について学ぶように理解した時もあった。また、「カリキュラム」という言葉が出てきたこともあったので、関心あるテーマをお伝えした上で、用意された「カリキュラム」に従って研修するのだろうかと、“待ち”の姿勢になった時もあった。

しばらくして、エルゼビア・ジャパンの担当者を通じて、Elsevier本社の担当者から、私が直接、ピッツバーグ大学図書館とやり取りすればよいとの連絡を頂いた。調査研究的なものだと分かり始めたのもこの頃だった。と言っても、具体的な実務を中心に据えることも、テーマを絞った調査をすることも可能であり、自らの責任で選択できる状況であった。

そこに至るまでは、私もそのようなノウハウも少なく、進め方について思い悩むことが多かった。悩みながらも、メールや電話連絡を基本に、少ない機会を活かして、エルゼビア・ジャパンの担当者と直接お会いして、相談できたのは大変役に立った。メールや電話では限界があると実感した一幕であった。

4.2.2 出張先との直接相談

その後、ピッツバーグ大学図書館のグッド長橋広行氏が窓口となっていただき、研修テーマの整理や、仮日程の調整を進めることができた（なお、メールの文面は英語であり、初期の頃からファーストネームでのやり取りであった）。

この段階でも、研修テーマを具体的な計画にするのは、慣れていないせいもあってか、正直なところ、手探り的な作業だった。

例えば、グッド氏から、「○○については、何週間ほど日数をかけたいか」と質問のメールが来たときには、遠慮ととまどいを感じたが、結局のところ、具体的な要望をお伝えしないと、話が進まないと感じた。それは、国内の他機関をご訪問する時でも具体的な日時をベースに照会した方がスムーズに行くことと同じではないだろうか。

そのようにして、とまどいも感じつつ、具体的かつ仮の（tentative）日程をまとめていくことができた。この“tentative”という言葉にはある意味安心を覚えたが、ともかく仮にでも決めないと調整もできないことは、当然のことだが、実感した。さらに言えば、3ヶ月も先の日程を決める訳なので、訪問先の担当者の都合にも変化があって当然であり、日程が変われば臨機応変に対応すればよいだけである。調査研究的な出張であれば、なおさら、空いた時間にすべきことを見つけるのも仕事であるし、普通に問題意識があれば見つかるものである。

4.3 事前の研修テーマの結果は

4.1に記した大項目レベルでの研修テーマは、実際にも調査できたと理解している。

しかし、それぞれの下位の項目になると、担当の方とアポイントメントが取れなかったことや、時間切れで調査しきれなかったこともあった。

一方、滞在中に新たな発見もあり、なるべく幅広くという当初の考えは、個人的には概ね達成できたと感じている。もちろん、周囲の助けがあってのことである。

反省を述べるなら、事前の準備や調査に時間をかけられていればベターだったと感じるところである。欲を言えば切りはないが、事前準備は広く深くに越したことはない。その結果、「違いに驚く」部分を少なくできれば、ある事柄の背景等を考察することもよりできるであろう。

○5．準備○

準備といっても、多種多様に渡るので、本稿では他ではあまり聞かない事柄をいくつか記す。

5.1 英文履歴書

これは当初、Elsevier本社に提出するために作成した。実は初めて書いた英文履歴書であった。経験者にサンプルを頂き、本やネット上で参考資料を探した。一方、自分の経歴を整理・表現するいい機会であった。また、仕事に関する英語表現を調べるのにも、いい機会であった。

履歴書の書き方は、英語を学習する時には、全く気にしていなかったので、関心のある方は、少しアンテナを張っておかれてはいかがだろうか。

5.2 現地用のプリンタ

仕事用の印刷はオフィスで行えばよいのだが、急ぎや私用のため、現地のアパートで印刷できた方がよいだろうと考えた。当初は日本からコンパクトなプリンタを持参することも考えたが、重量や値段の点から、現地調達することにした。

それでも、日本語版のOSにプリンタドライバが対応するのか、そもそもどこで買えるか心配だったが、特に問題はなかった。前者は拍子抜けするくらいスムーズにできた。後者も、ピッツバーグ大学のライブラリアンに店舗の情報等を教えていただき（結局はクルマでお店まで送っていただき）問題なかった。予備のインクカートリッジも、徒歩20分程度の店舗で入手可能だった。

なお、プリンタ自体は、帰国前にピッツバーグ在住日本人関係者のメーリングリストに“ムービングセール”の募集をしたが、残念ながら問い合わせ

はなく、結局、友人の留学生を通じて、別の留学生に売却することができた。

5.3 ビザ

5.3.1 経緯等

あくまで事例紹介として、2−3ヶ月も訪問交流者の身分で渡米するなら、J1（訪問交流者）ビザを取得した方がよかった、ということをお伝えする。

ビザは、実際的には研修自体より重要と言ってもいいかもしれない。手続きや書面のやり取りには相当の日数を要する。遅れがちだと、焦りにつながり、出張準備だけでなく日常の仕事にも差し支えるだろう。

J1ビザの場合、訪問先から"DS-2019"という書類の取り寄せや、アメリカ大使館（総領事館）での面接等のあとに、ビザが発行されるようだと分かった。“J1ビザ”や"DS-2019"という書類は、米国の大学に数ヶ月の交流で滞在される方にとっては、非常にメジャーな様子だった。

平行して、ピッツバーグ大学の国際交流部から、ビザ発給に関連する書類の作成依頼がメールで送られ（当然英語）、慌てて読み解いたこともあったと記憶している。

5.3.2 選択した方法

種々の検討の結果、ビザ免除プログラムの適用を受けて入国・滞在することとした。有料の「米国大使館ビザ情報サービス」も利用した。その回答に基づき、ピッツバーグ大学にはしかるべき内容の記載された公式文書も作成いただいた。

しかし、ある意味、イレギュラーな滞在方法であり、ピッツバーグ大学の担当者への事情の説明、文書の作成依頼は多少繁雑な面もあった。書類の作成は複数回に渡ってお願いすることになった。

5.3.3 何が問題だったか

米国に入国後、天候による欠航のニュースをよく耳にしたせいもあり、滞在予定日数がビザ免除プログラムで許可されるぎりぎりの90日であることの不安が大きくなってきた。日本への帰国便がキャンセルされた場合、どうなるのかということである。そして、ピッツバーグ大学の国際交流部の担当者に相談に乗っていただいたり、「米国大使館ビザ情報サービス」に再度問い合わせたりした。

対応方法については記述を割愛するが、今後、よく似たケースの方がいらっしゃれば、注意いただければと思う。

○6．ピッツバーグ大学での職場環境○

6.1 身分

ピッツバーグ大学での私の身分は、Visiting Faculty（客員研究員）であった。手続き的には、国際交流部にチェックインフォームを提出した。そのフォームは東アジア図書館の責任者がサインをされた。それによって、ただの見学者ではなく、一時的にせよ学内者としての扱いを受けることとなった。

また、身分証も発行された。図書館の利用者カードとしてはもちろん、大学内のカフェテリアや町のお店での買い物にも利用できた。

6.2 コンピュータ・アカウント

大学のコンピュータ・アカウント（メールアカウントを兼ねる）は、図書館内の職員が登録権限をお持ちの様子で、図書館内の手続きで、大学のアカウントを取得することができた。メールアカウントは、初日から使えるようになっていると便利かと思い、事前にお願いしたように記憶しているが、それはかなわなかった。しかし、申請の翌日には頂くことができた。

一方、私が親しんでいたメールサーバは、“POP”であるが、ピッツバーグ大学では"IMAP”だったため、当初はメールソフトの選択、オフィスのパソコンに自分でメールソフトをインストールできるのかといった問い合わせで混乱した。そして、自分のノートパソコンで試そうにも無線

LANにつなぐのに一定の手順が必要だったため、Webメールの仕組みを試すのにもひと苦労であった。ある意味、各種のサービスを試し、サポート体制を垣間見ることはできたが、当初はネットワーク環境と格闘する日々であった。

6.3 オフィス

オフィスは、中央図書館であるヒルマン・ライブラリー内にある東アジア図書館に、個室を与えていただいた。

詳しくは拙稿をご覧頂きたいが[10)]、意外に苦労したのが建物の「鍵」についてである。ルールの面で、私の身分では建物や事務室の鍵を借りることができなかった。

朝の7時50分頃から開館している通常期はよいのだが、冬休み中など、8時半に開館する時は、早めに出勤すると仕事ができず、出勤時間を適当に調整していた。

また、夕方や夜も、オフィスを長時間留守にもできないし、自分を閉め出さないように注意する必要があった。特にプリンタを使用することでなければ、閲覧室や学内の適当な場所で無線LANを使いつつ、仕事をしていることもあった。それはそれで、図書館や学内の情報環境も理解することができてよかった。

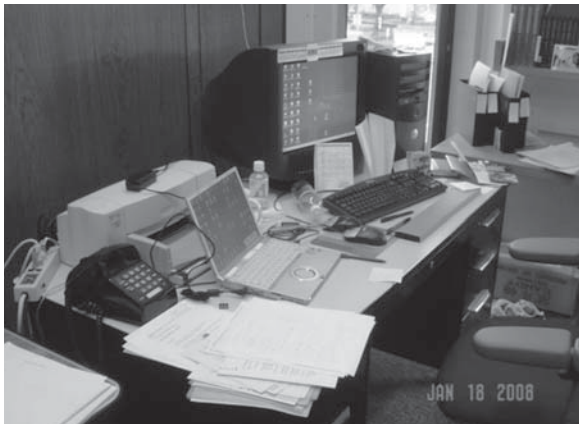

写真2. オフィスの様子

○7．調査の進め方○

調査の進め方はテーマによって少し異なったので、場合別に概略を述べる。

7.1 サービス系

私が示したテーマに基づいて、レファレンス兼インストラクション部門の責任者を紹介いただいた。その責任者とアポイントメントを取り、ガイダンスを受け、私のサブテーマをお示しした。そして、サブテーマごとに担当のライブラリアンを教えていただいた。まずは名前を覚えるのが大変だったが、責任者からそれぞれの方に“適宜ご協力下さい”といった感じのメールを書いていただいたので、あとは自分で進めることになった。

具体的には、このような手順であった。

・日程調整できる程度の質問事項のまとめ
・インタビューを受けていただくための日程調整（ほとんどメールにて）
　まずはカレンダーを埋めて、手探りで進めていくような感じであった。
・インタビューのための質問事項整理
・インタビュー実施
・まとめ

他の調査事項などをこなしつつ、上記の手順をサブテーマごとに平行して進めた。

7.2 情報系

情報系もサービス系と同様に、システム部門の責任者を紹介いただいた。サービス系の場合は、数名の担当者とお話ししたが、情報系の方は、責任者の方とお話しすることが大半であった。

情報系は基本的に滞在期間の後半の予定であったが、責任者の好意で、事前に半日程度の概要説明の機会を設けていただいた。おかげでシステム関係の環境など、多少の理解を得ながら時間を過ごすことができた。

実際に予定している時期になると、その方も忙しく、インタビューのお約束がなかなか取れない

こともあった。一方、私の方も段々と忙しくなり、広がる関心と残り時間に折り合いを付けながら、まとめていくような状況であった。

7.3 東アジア図書館関係

当初から研修テーマにも上げていたが、同僚と話をしている内に、日本情報センターという場所で2-3時間程度を数回、レファレンスの仕事を見学させていただいた。わずかではあったが、具体的な依頼事項について、抄録なども含まれる目録情報を参照しながら調べるのはよい経験だった。また、ちょっとした空き時間に質問などさせていただいたりもした。

7.4 その他

大阪大学での担当業務が図書館のシステム関係ということもあり、大学のインフラ（例えば身分証なども）を利用する立場で接する機会があれば、その機会に事実や印象を整理した。

それ以外は、出張の準備や、Elsevier本社から依頼された原稿執筆、ピッツバーグ大学図書館での発表準備など、時間と相談しながら進めた。

○8．個別トピック○

今回の出張で感じた基本的な印象は、日本の大学図書館では比較的特別、ないし新しい事柄が、とても日常的なものだということであった。

以下では、興味深いと感じた個別トピックについて、概説する。

8.1 次世代OPAC

非常にいいタイミングだった。北米の各地で導入が進行中で、ピッツバーグ大学図書館では、それに向けて検討中だった。ワーキンググループのメンバーにインタビューするところから始まり、検討用の資料も参照させていただいた。滞在中にベンダーのデモも4回程あり、その内2回に参加することができた[11) 12) 13)]。 ピッツバーグ大学図書館がその後、“AquaBrower”を採用したというニュースも身近に感じることができた。

8.2 ラーニングコモンズ

ヒルマン・ライブラリーでは、特に命名されていなかったが、パソコン等が使える環境と、議論も行える場所という意味では、十二分に機能を発揮していた。

一人の利用者としては、静かな場所を探すのに苦労したこともあったのも事実だが、授業の課題について議論しているらしき学生の姿は日常的に見ることができた。

8.3 館内のIT環境

8.3.1 パソコン、プリンタ

非常に充実していた。

大学の情報基盤センター（Computing Services & Systems Development）のComputing Labがヒルマン・ライブラリー（約40台）を含め、学内に7ヶ所、図書館が運用するパソコンは、ヒルマン・ライブラリーに約70台設置されていた。Computing Labには、ヘルプデスクも設置されていた。常時観察していたわけではないが、稼働率は高い様子だった。

Computing Labにはプリンタが設置されており、お昼の時間などはフル稼働していた。印刷されたものは、自分のアカウントの表示された表紙と共に出力され、それをスタッフが所定の台に並べるという仕組みだった。

情報科学研究科の院生の場合、セメスター毎に700枚を無料で印刷することができた（私の身分では、お金を“ロード”してから印刷する）。かつて電子資料がなかった頃にコピー機が活躍していたように、電子資料が広がった近年では、プリンタがその役割を引き継いでいるということを改めて感じた。また、大阪大学や京都大学などでは、パソコンからの印刷を有料化する動きもあり、まずは自由に印刷できる環境をうらやましく感じた。

8.3.2 無線LAN

情報基盤センターが整備していた。ヒルマン・ライブラリー内はほぼ全域がカバーされていた。その他、カフェテリア、講義等、イベントセンターなど多くの場所がカバーされており、なお拡大中であった。私自身も、無線LANは、“あるのが普通”という感覚を抱いた。

8.3.3 VPN及びアカウント管理

VPNとは “Virtual Private Network” の略であるが、大学図書館の世界では、IPアドレスで接続制限されているインターネット上のサービス（電子ジャーナルや学術データベース）に、自宅等からでも接続するためのものと理解されている。

ピッツバーグ大学図書館のシステム担当者に必要度をお聞きしてみると、“Essential!”とのお答えだった。学生の立場にしても、自宅からでも無線LANのあるカフェテリアからでも、ピッツバーグ大学が提供するコンテンツを使いながら、レポートや宿題を書くことができる（なお、日本で近年話題のUPKIのことについて耳にする機会はなかった）。

この話の流れで、大学のコンピュータ・アカウントの概要もお聞きすることができた。ピッツバーグ大学の場合、PrimaryとSponsoredの2つに分かれているそうである。前者は、普通の学生・教職員を指す。私は、後者であった。大学構成員のある個人によってSponsored（承認）されているということになる。

詳細を調査することができなかったのは残念であるが、大学のコンピュータ・アカウントの属性情報が、各サービスの利用権限と上手く連携しているように思われた。私も普段、大阪大学でのシステム間の連携（例えば、ユーザレコードの受け渡し）に苦労を感じることもあるからだが、ピッツバーグ大学では各種のオンラインのサービスが、統一的に設計・運用されている印象を受けた。

8.3.4 構成員向けの大学ポータル

大学ポータルも多様な機能があった。正確に言えば、システム的には別のサービスが大学ポータルを通して、統一的に提供されているように見受けられた。学生等と話をしていると、“my.pitt.edu（大学ポータル）に○○がある” ということを時折聞いたので、かなり浸透している印象を受けた。

珍しいものとしては、Emergency Notification Service（緊急通知サービス）というものも、大学ポータルから利用できた。電話番号を登録すれば、緊急時に電話（おそらく自動音声）やテキストメッセージ、ボイスメッセージで知らせてくれるものである。私の滞在中にはなかったが、"bomb threats"（爆弾予告?）があったときには、使用されたそうだ。

8.3.5 “Student Computing Fee”

IT環境は非常に充実していたが財政的な基盤もあった。それは“Student Computing Fee”である。フルタイムの学生の場合、半期でUS $150を納める必要があり、概数で年間10億円のお金を生み出すことになる。それがコンピュータ等の整備に使われるということであった。かなり驚いたが、それを意志決定するための組織やポストの役割も垣間見ることができた。

8.4 学生証、身分証

学生証や身分証は、磁気ストライプ付きのカードであり、非常に多機能で便利だった。図書館のカードとしても、学内施設や町の一部のスーパーやレストランでも使用できるプリペイドカードとしても使えることができる。市バスで提示すれば無料で乗車することもできる（但し、学生はTransportation Feeを支払っている。これも私の身分では利用不可）。

学生部に当たる部署が運用しているようだった。

日本の大学では身分証をICカード化する議論があまり進まないように思われるが、キャッシュレスの文化や、セキュリティに対する認識の違いも背景にあるのかと感じられた。

8.5 調査出張

2008年2月上旬の1週間を使い、次の大学図書館を訪問した。アメリカ東部のHarvard University、カナダ東部の中規模大学Queen's University 及びUniversity of Guelphである。

Harvard Universityは知名度で選んだ要素もあるが、カナダの2つの大学については、カナダ全国紙にある大学ランキングの記事をたまたま旅行中に見つけ、そこで上位にランクされていた大学から選択した。日本ではあまり紹介される機会が少ないところを選んだ。

非常に有意義な調査出張であった。それは、ピッツバーグ大学図書館で提供されているサービスが、個別の事例ではなく、北米では一般的なものだということが理解できたからである。

また、Harvard Universityでは、京都大学から派遣されていた江上敏哲氏からの紹介もあり、訪問日に偶然にも開催された次世代OPACについての館内向け報告会を聴講させていただく機会にも恵まれた[14) 15)]。

カナダの2つの大学も、ラーニングコモンズの充実やスペースの活用方法、カフェテリアやコンピュータのヘルプデスク等の併設は素晴らしいと感じた。Queen's Universityでは次世代OPACの検討状況についてもお聞きすることができた。University of Guelphでは、近隣2つの大学図書館との非常にユニークな連携についても興味深い話を聞くことができた[16)]。

8.6 授業の聴講

当初は予定に入れていなかったが、図書館情報学の1つの授業を合計6回ほど聴講させていただいた。授業名は"Marketing and Public Relations for Libraries"である。

グッド氏から聴講についての提案を頂き、授業のリストから3つの候補を選択した。担当講師の了解も得た上で、セメスター最初のクラスに参加させていただいた（1月から春のセメスターが始まったのもいいタイミングだった）。その中から、自分の関心や時間帯から上記の授業を選んだ[17)]。

あくまで聴講であり、時間の都合もあって課題等をこなすことはしなかったが、授業の雰囲気や中味も垣間見ることができた。いろいろなディスカッションが行われるのも気持ちがいいものだった（履歴書をオンラインで提出するという課題があった時には、研修前に作成した英文履歴書をアップロードした）。

学生の学習の様子を観察することもできた。Black Boardという授業支援システムへのアクセス権も登録いただいた結果、講師からの連絡事項、掲示板での質問や議論のやり取り、オンラインの学生向けに録画された授業ビデオの視聴、使用された資料の入手を実体験することができた。同時に、図書館のアルバイト学生や知り合った日本人留学生、特には国立国会図書館から派遣されていた依田紀久氏の経験なども聞きながら、それらの様子を概観することができた[18)]。

しかし、マーケティングに関することを普通に学習している場所に身を置く一方、自分がそのことについて詳しく知らないことや、今回学習する時間を多く持てないということに対して、ある種の居心地の悪さも当初は感じた。けれども、そのことが自分のモチベーションを上げることにもなったと感じている。

○9．長期・滞在型海外研修について○

私自身にとっては初めての海外研修であったが、江上氏の書かれた長期・滞在型研修の利点と課題について[14)]、私の印象を書き加えたい。

・「アウトプットによる貢献、コミュニケーションという体験」

私の場合、なるべく日本ないし勤務校の状況などをお伝えするように努力した。それは、ただ先方から聞くだけというのは居心地の悪さを感じたことと、先方にも興味があるだろうと思われたからである。最も大きかったものは、"Brown bag talk[19)]"で日本の国立大学でのシステム更新の概

要をお話ししたことである。日米の違いについて、興味深く聞いていただけた様子であった。確かにこのようなものを通して多様な形で交流することができる。

・「学内・館内の一員として行動・情報入手ができる」

これはまさしくその通りである。短期の視察と比べられない量・質の情報が手に入る。大学の設備全般についても知ることができる（例えばスポーツジムも含め）。

・「社会・文化・習俗等、背景にあるものを知る」

背景にあるものを知るのは難しいことであるが、これも基本的にその通りである。例えば、短期の旅行でも、あることに対する背景に思いを巡らすこともあるかと思うが、長期に滞在することによって見えてくるものはある。

・「マイナス面があること、そのまま導入できないことに気付く」

私の場合はマイナス面に気が回るほどではなかったと自己認識しているが、先進的といわれるものがそのまま導入できないことは、背景の違いも含め認識せざるを得なかった。そこから日本の状況も考慮しつつ、何をどうすればいいのかを考えること、さらにはそれらの状況の違いなどを意見交換できる人を作ることが大事だと考える。

また、ここには自分の情報発信能力も関わってくるのではないかと思うこともある。

・「人事・キャリアパスとの連動性」

確かに、日本の大学図書館のように担当する分野も不確定な状況では相当困難であろう。だからというわけではないが、私はその時の担当/関連業務を軸に、テーマを広げたのかもしれない。

・「報告をオープンにリアルタイムで」

私もなるべく自分の経験を他の方と共有したいと考えていた。渡米前に江上氏のそのような考えもお聞きしていたし、エルゼビア・ジャパンの担当者からも“一人で噛みしめるより、他の方との共有を”と助言も頂いていた。

江上氏の「ハーバード日記」[20] の存在もあったので、何かやってみたいという思いから、ブログ的なレポートを作成した[21]。正直なところ、着地点的な明確な目標があったというよりは、まずは何かを伝えようということしか考えていなかった。

けれども、一部で役立っている様子の「次世代OPAC導入事例リンク集」[22] はここから生まれたので、その点はよかったと考えている。

江上氏が述べるように、こういったことが「オフィシャルな場で展開され」れば、一人の経験がより広がるきっかけになるのではないだろうか。

なお、私もプライベートなブログを作成したが、あくまでそれは“面白い”と感じてくれる人がいたり、同じような経験をしようとする人の参考にはなればよいというものであった[23]。

・「研修事業定着のための情報共有と橋渡しの仕組み」

私も日本の大学図書館と交流したいという声も聞いた。財源や人員の問題はあるとしても、個別図書館同士や少し大きな単位での交流も広がり、継続的な事業化やノウハウの共有が進めば、滞在型研修も広がりやすくなるのではないか。

○10．本研修から生まれたもの○

1－2年程度での短期的な成果が出せるようなテーマ設定をエルゼビア・ジャパンの担当者から助言いただいていたが、次世代OPACに関する情報交換の枠組みを作れたのは、多少の成果だとさせていただきたい。

これは、拙稿[12] にも経緯を紹介しているが、本研修プログラムの1人目である片岡真氏との情報交換などをきっかけに、いくつかの偶然が上手く重なり、「次世代OPAC情報交換用メーリングリスト」などを作ることができた。

個人的には、大阪大学附属図書館のシステム更新のタイミング的には、導入の先駆者とはなりにくかったが、先行して検討を開始している図書館員や図書館を何らかの形でお手伝いしたいと考えていた。

また、これも多少は個人的な経験であるが、図書館業務システムの更新や導入について、他の大

学図書館やシステムベンダーと議論する機会にもつながったことは、うれしく思っている。

具体的な担当業務に沿った研修とはしなかったので、目に見える成果を作るのは難しいとも感じていたが、何かを生み出すきっかけ作りまではできたのだとしたら、幸いである。

○11．まとめ○

約3ヶ月という出張期間は、時には短いとも、時には長いとも言われることがあるが、私自身としては、もう少し長ければという気持ちの方が強いだろうか。それはタイミングや人の縁に恵まれ、ピッツバーグ大学図書館を巡る私の環境が充実していたからこそ、そう感じられるのだと思われる。

私はそれまで、研修や出張は“借金”だと、つまり、頂いたお金や時間程度はお返しすべきものだと考えていたが、ピッツバーグ滞在中に借りた本を読んで、借金ではなく、“投資を受けている”のだと考えを改めた。頂いた分だけお返しするのではなく、それ以上の“リターン”を発生させないといけないということである。

私個人の心がけとしては、そこを忘れないようにしたいが、他の方にとって、今後も滞在型の研修などを通じて、日本の大学の充実に寄与できるような機会が多く設けられることを期待する。

謝辞

出張の準備段階から、出張中、そして帰国後と、多くの方々に大変お世話になりました。特に、グッド長橋広行氏、Hong Xu氏をはじめとするピッツバーグ大学図書館の皆さま、ピッツバーグ大学の皆さま、ピッツバーグ大学School of Information Sciencesの皆さま、アメリカ・カナダのライブラリアンの方々、現地で様々な情報交換をさせていただいた皆さま、この出張をきっかけに知り合うことができた関係者の皆さまに、心より深く感謝申し上げます。

また、出張のプログラムを提供いただき、準備段階でもご協力いただいた Elsevier本社 及びエルゼヒア・ジャパンの皆さま、出張の機会を頂いた大阪大学附属図書館、ご理解いただいた情報推進部の皆さまに感謝申し上げます。私の所属部署、及び関係部署、仕事上の関係者の皆さまにご迷惑をおかけした点をお詫びしつつ、改めて感謝申し上げます。

最後に、公私ともに支えていただいたピッツバーグを中心とするアメリカ及び日本各地の皆さまに、改めて感謝申し上げます。

本当にありがとうございました。

参考文献・注

1）Elsevier社のOutreach Program についてのサイト Library Connect LIS Outreach Program <http://www.elsevier.com/wps/find/librarianshome.librarians/LISOutreach>（accessed 2009-06-03）

2）筆者より1年前に”一人目”として本プログラムでトロント大学に派遣された九州大学の片岡真氏のインタビュー記事.
Librarian Residency Promotes International Collaboration. Library Connect 5（2）（April, 2007）<http://libraryconnect.elsevier.com/lcn/0502/lcn050208.html>（accessed 2009-06-03）

3）2）の日本語訳版.「図書館員研修プログラムが国際協力を促進」『ライブラリ・コネクト・ニュースレター日本語版』5（2）（4, 2007）<http://japan.elsevier.com/news/lc/lcn0502jpn.pdf>（accessed 2009-06-03）

4）筆者のピッツバーグ滞在を伝えるElsevier社のニュース 2nd LC international residency takes Japanese librarian to Pitt. Library Connect News（February 7, 2008）<http://libraryconnect.blogspot.com/2008/02/2nd-lc-international-residency-takes.html>（accessed 2009-06-03）

5）「九大図書館、トロント大図書館と学術交流協定」『文教速報』平成20年2月29日（第7133号），5（2008）

6）「九州大学 部局間 学術・学生交流協定校一覧

(2009年06月01日現在)」<http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/intlweb/agreeview/agree-list2.php>（accessed 2009-06-03）

7）実際のところ、冬期の場合、荷物も増える。積雪、凍結、低温など生活の困難さも増える。交通機関の乱れの可能性も高まる。体調に対する配慮も増える（無事に過ごしてしまうと、それも異文化経験と思えるのも事実である）。

8）Best Library and Information Studies Schools. <http://grad-schools.usnews.rankingsandreviews.com/best-graduate-schools/top-library-information-science-programs?s_cid=related-links:TOP>（accessed 2009-06-03）

9）[East Asian Library]. Archived News<http://www.library.pitt.edu/libraries/eal/About-News-Old.htm>（accessed 2009-05-08）

10）久保山健「冬のピッツバーグ大学図書館での研修」『大阪大学図書館報』42（1）,8（9, 2008）<http://www.library.osaka-u.ac.jp/kanpo/42-1.pdf>（accessed 2009-06-03）

11）工藤絵理子, 片岡真「次世代OPACの可能性－その特徴と導入への課題－」『情報管理』51（7）, 480-498（10, 2008）

12）久保山健「次世代OPACを巡る動向：その機能と日本での展開」『情報の科学と技術』58（12）, 602-609（12, 2008）

13）片岡真氏と情報交換する中で、リンク集も作成した。
久保山健『次世代OPAC 導入事例リンク集』<http://dwsv.library.osaka-u.ac.jp/pitt_report/pitt200803ngc.html>（accessed 2009-04-02）

14）江上氏は帰国後にこのような報告をまとめている。江上敏哲「長期・滞在型海外研修の実際：ハーバード大学イェンチン図書館実地研修」『大学図書館研究』84, 47-55（12, 2008）

15）江上敏哲「次世代OPACへ向けて – Discovery and Metadata Coordinating Committee. ハーバード日記」『京都大学図書館機構』<http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/wordpress/index.php?p=70>（accessed 2009-06-02）

16）TriUniversity Group of Libraries（TUG）.<http://www.tug-libraries.on.ca/>（accessed 2008-08-25）

17）筆者が聴講した2008年春のセメスターの授業一覧: http://www.sis.pitt.edu/~sisint/archives/courses/08_4/084lis.html（accessed 2009-06-03）
なお、School of Information Sciences のサイト：
<http://www.ischool.pitt.edu/>（accessed 2009-06-03）

18）資金調達、Fund raising も広い意味でマーケティングに含まれるだろう。
依田紀久「米国公共図書館の経営と資金調達」『情報の科学と技術』58（10）, 492-498（10, 2008）

19）”Brown bag talk”：昼休みの時間に誰かが発表し、軽食を食べながら参加するというもの。ピッツバーグ大学図書館ではVisiting librarian はここで発表するのが慣習。

20）江上敏哲「ハーバード日記:司書が見たアメリカ」『京都大学図書館機構』<http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/wordpress/>（accessed 2009-05-25）

21）久保山健「ピッツバーグ（Pittsburgh）便り」<http://dwsv.library.osaka-u.ac.jp/pitt_report/pitt_report.html>（accessed 2009-05-08）

22）久保山健『次世代OPAC導入事例リンク集』http://dwsv.library.osaka-u.ac.jp/pitt_report/pitt200803ngc.html（accessed 2009-05-25）

23）久保山健「システム担当ライブラリアンの日記」<http://blog.goo.ne.jp/kuboyan_at_pitt>（accessed 2009-06-03）

以下、筆者によるその他のレポート類

24）Kuboyama T. 10 weeks @ the University of Pittsburgh Libraries: Realizing the differences. Library Connect 6（2）（April, 2008）<http://libraryconnect.elsevier.com/lcn/0602/lcn0602.pdf>（accessed 2009-06-03）

25）上の日本語翻訳版. 久保山健「ピッツバーグ大学図書館での10週間：違いを知る」『ライブラリ・コネクト・ニュースレター日本語版』6（2）（4, 2008）<http://japan.elsevier.com/news/lc/lcn0602jpn.pdf>（accessed 2009-06-03）

26）久保山健「海外研修の経験を生かすって？」『大学の図書館』27（11）（No.420）（11, 2008）